

留学の意義について

久松理一先生からご紹介をいただきました 70 回腎臓内科の菅野義彦です。多様な進路が選択できる現在と違って、卒業後は当たり前のこととして母校で研修を行い、よく考えもせずに診療科を決め、いまの若い先生に引かれてしまい笑い話にもならないようなトレーニングを受け、言われるままに実験をして論文を書き続けてきた世代です。私はいわゆる成績が良かったから医学部に来たタイプなので、今だったら率先して在学中に起業するような学生になったのではないかと思っています。そんなわれわれが育った三十年間で世界が最も変わったのはスマートフォンの出現だと言われています。インターネットの出現も大変なことでしたが、スマートフォンにより個別に手軽に世界へのアクセスが容易になりました。私たちの医療という狭い中でも、インターネットによりいろいろなことが変わりました。少し上の世代から、実験が終わってから医局員が集まって統計計算をそろばんでやっていた話を面白おかしくうかがっていた私たちも、論文を書き終えてレターパッドの用紙を入手し、印刷してコピーして高額な Fedex で投稿するときの達成感と興奮は忘れられませんが、これすべて若い先生には同じレベルの話です。



留学も postal mail でやり取りをしていたことを思い出します。私は学会で訪れたイスラエルのレストランで夜中に偶然相席したのが同じ領域の方で、そのご縁でワシントン DC に留学しましたが、ときどき高額な FAX を使ったものこちらから問い合わせた返事を数週間待つのが当たり前でした。また留学した後は電話回線でインターネットが使えるようになりましたが、連絡を取りたい日本での環境が不十分で、メールをローマ字で送った覚えがあります (Ogenkidesuka?)。ワシントン DC は NIH に近いので日本人研究者村のような地域があり、他の領域、他の施設からの留学生とも家族ぐるみで交流がありました。それぞれの研究室での困りごとに対してそれぞれの体験談で解決し、毎日を粘り強く過ごしていました。また航空運賃も安くなかったのも、とにかくコミュニケーションに飢えていました。

学会で日本の仲間、慶應の仲間に出会うといつまでも一緒にいてうっとうしがられたのではないかと思います。東京医大に来て早や10年目になりますが、今年初めて自分の教室から留学生が誕生します。また来年は中国からの留学生を迎えます。それぞれコロナで数年遅れてのスタートですが、昔と違う目的、昔と違うモチベーションで異文化に臨む方々を精一杯応援したいと思います。

次のエッセイストを選ぶのはとても難しいことでした。同級生や同じ研究室でお願いするのが簡単ですが、面識のない若い方にお願いするのも面白いですし、三浦先生から穂刈先生に飛んできたので、現在日本の医療を牽引されている60-69回生にお願いした方が有意義なお話を執筆いただけるかとも思いました。もちろん留学の話をしたので、同時期に渡米してずっとアメリカで活躍している方にお願いすることも考えました。しかしながら私の留学生活の最初の空港到着から最後までご親切に面倒を見てくださった66回神経内科の後藤淳先生にお願いしたいと思います。